

白石 昌也 著

『ベトナム——革命と建設のはざま——』

東アジアの国家と社会 5
東京大学出版会 1993年 vi+273+7 ページ

古 田 元 夫

I

最初に本書の構成を示しておきたい。

序 章 二段階革命から刷新へ

第1章 民族民主主義革命

第2章 北ベトナムにおける社会主義革命

第3章 第2次5カ年計画の頓挫

第4章 刷新路線の展開

終 章 ベトナムの現状と将来

本書の構成と「革命と建設のはざま」という本書の副題は、ベトナムという対象に対する著者の立場を明確に物語っているように思われる。

著者は、何よりもまず、ベトナムの現状を、ベトナム現代史の連続性の中に位置づけて把握しようとしている。ベトナムも、本書のシリーズが取り扱っている他の東アジア諸国同様、現在大きな変革の途上にある。評者のように、「刷新」が提示される以前の旧来の社会主義システム下にあったハノイに長期滞在したものにとっては、現在のハノイは全く別世界であるかのように見えるほどである。しかし、本書で著者が採用しているのは、こうした変化をあくまでも、ベトナム共産党が1930年の結成以来とってきた、民族民主主義革命から社会主義革命へという二段階革命論の枠組の延長として把握するという立場である。

この立場は、ベトナムの共産党と国家が、引き続き「社会主義」という理念を掲げていることを重視する著者の姿勢に直結しているように思われる。著者は序章で、現在ベトナム共産党が展開している刷新政策を、次のようにまとめている。

「しかし、刷新政策の展開は、社会主義からの離別を意味するわけではない。二段階革命のテーゼに即して言えば、刷新を追求する現在の段階は、社会主義への過渡期の最初の段階に当る。つまり将来において、より本格的な社会主義建設の段階へと進む展望を放棄したわけではない。さらにベトナムはソ連・東欧諸国とは異なって、あくまでも共産党による支配体制を堅持し、その枠組の中で経済改革・対外開放を追求する姿勢を示している。ベトナムは社会主義体制を維持し、また維持し続けたいと望んでいる国家の一つである」(27ページ)。

これは、ベトナム共産党の論理の説明としては、きわめて正確な記述である。しかし、この点を出発点として、「革命と建設のはざま」というベトナム共産党が権力を掌握して以来一貫して直面してきたジレンマの枠組の中で、ベトナムの現状を分析しようとする著者の姿勢は、同じシリーズの中で「社会主義国家」中国と北朝鮮を取り上げている天児氏と鐸木氏の本が、両国をもはや「社会主義国家」として把握することに懐疑的な姿勢をとっていることと比較すると、本書のきわだった特徴になっているように思われる。このことは、中国の巻に天児氏がつけた「溶変する社会主義大国」という副題や、北朝鮮に関する巻で鐸木氏が試みた「首領制」という概念などと本書を比較した場合、容易に目につく特色である。

II

以上のような基本的特徴を有する本書は、きわめて手堅いベトナム現代政治史の概説になっている。特に1975年のベトナム戦争終結以後に関しては、日本では、簡単な概観かきわめて専門的で局部的な側面を扱った論文しか存在していないので、ベトナム研究という角度から見た場合に、本書の価値はきわめて高いと言える。

たとえば著者は、1986年12月のベトナム共産党第6回大会で刷新路線が採用された背景として、(1)従来の社会主義建設路線と統制経済システムの行き詰まり、(2)改革推進派による諸施策のある程度の成果、(3)ソ連や中国の改革の影響、(4)援助の効率的な使用、互酬化に

関するソ連・東欧諸国からの圧力、(5)西側からの資金導入の必要、(6)レ・ズアン書記長の死と変革を求める草の根の声という、6つの要因を指摘している(171～172ページ)。

これらは、いずれも従来の研究によってなんらかの形で指摘されていた論点である。その意味では、目新しい議論が展開されているわけではない。しかし、このような簡潔な整理には、著者のきわめて高度なベトナム研究者としての力量が示されていると思われる。著者がとっているのは、既存の研究をふまえつつ、ベトナム共産党の路線転換を促したきわめて錯綜した国際的・国内的要因を網羅的に検討し、従来の研究が提示している諸論点の中から、根拠が比較的明瞭なものを選択し、スペキュレーションの類を排して、このような整理を行なうという方法である。

著者は、ベトナム共産党の政策の展開を分析するにあたって、「保守派」対「改革推進派」という図式を採用し、両派の定義を明確にしている(156ページ)が、明瞭な根拠があると思われる場合以外は、個々の指導者をこの両派に割り振ることは慎重な姿勢をとっている。これは、ベトナム共産党内部には深刻な意見の対立が存在すること、にもかかわらず、従来のベトナム研究は、ベトナム共産党指導部内の「派閥」の分析には成功してこなかったことの双方をふまえて、著者が本書で採用している方法である。このような方法は、本書の議論の展開をきわめて手堅く、説得的なものとしているように思われる(ただ一点、この分析視角で私が感じた問題をあげれば、175ページにあるレ・ドク・ト＝「保守派の最長老」という指摘である。レ・ズアンが「改革派の援護者」であったとするならば、レ・ドク・トも同様だったのではなかろうか。政治的民主化の主張のため1990年3月の第6回中央委員会で解任されたチャン・スアン・バック政治局・書記局員はレ・ドク・トの人脈に連なる人物であったことなど、検討すべき問題が多く残されているように思われる)。

さらに、本書は、統一ベトナムを統治するようになったベトナム共産党の路線・政策の展開を分析するにあたって、北部社会と南部社会という相当に異質な社会の双方にめくばりをして、この異質な社会を統合す

るという課題に直面したベトナム政治のダイナミズムを描くのにある程度成功している点においても、従来の日本の研究の水準を一步高めるのに貢献している。

以上に述べたような点で、本書は、ベトナムの現状を理解する上で絶好の教科書であると言えよう。この意味で、ベトナムに関するさまざまな関心が急速に増大しつつある今日、日本のベトナム研究が、このような業績を世に問うことができたのは、まことに時宜にかなったことだと考えられる。現状分析という分野は、バランスのとれた「教科書的」な記述を行なうには最も縁遠い分野のひとつである。こうした分野で教科書として使用できる著作を完成した著者の努力と力量に、同じベトナム研究を志すものとして敬意を表したい。

III

このように、評者は、本書のベトナム研究の単行本としての価値を高く評価している。あくまでもこのことを前提とした上で、以下に本書が「東アジアの国家と社会」というシリーズの一部として出版されたことに関連する問題点を指摘しておきたい。

第1は、「社会主義」をめぐる問題である。冒頭にもふれたように、著者が本書でとっている立場は、現在のベトナム共産党と国家が「社会主義の堅持」を標榜しているという現実を重視するというものである。これに対して、「社会主義」という概念に研究者の側が一定の定義を下し、その定義との関係で現存する「社会主義国家」を、「社会主義」という視角から問題にする意味があるかどうかを問う立場がありうる。このような定義の中で最も包括的なものは、資本主義システムに対する「反システム運動」としての社会主義というものであろうが、こうした定義からしても、資本主義世界経済への参入による経済発展を追求している中国やベトナムが、「社会主義」という範疇で検討すべき存在なのかどうか、今ではきわめて疑問視されていると言ってよいだろう。

このような状況でもなお、著者がとっている、研究対象であるベトナム自身が「社会主義」と言っているものを「社会主義」として認めるという立場はありうるし、私もこのような立場をとっている。しかし、著

者も「刷新路線の展開は、社会主義とは一体何なのかという、根源的な問いを誘発せざるを得ない」(203ページ)と指摘しているように、この概念の自明性は今日ではベトナム自身においても崩壊している。したがって、ベトナムが「社会主義を堅持する」という場合、この「社会主義」とはいかなる意味なのかを提示することが必要であろう。

これが、きわめて難しい問題であることは、当のベトナムの人々自身が認めているところである。私が昨年の秋にベトナムを訪問した際に、ベトナム社会科学の経済研究所の副所長に、政治面での共産党支配の維持というのはわかるとして、日々の現実の経済運営にとって「社会主義の堅持」が何を意味しているのかという質問をしたところ、「いや〜、実はそれが大問題なのだ」というのが回答であった。国営セクターが基幹部門を掌握するとか、格差のできるだけ少ない発展というのが回答だと言う人もいるが、これを「資本主義と社会主義」の本質的区分とするのは、経済学者としてはあまり説得的には思われないと副所長は述べていた。

他ならぬベトナムの指導的な位置にいる人がこのように答えるくらいだから、外部のベトナム研究者が、ベトナムの言う「社会主義」が何を意味しているのかを提示するのは、はなはだ容易ならざる作業であり、評者自身もこの課題に挑戦して、ベトナムが現在掲げている「社会主義」という看板の意味を、(1)「歴史の思い出としての社会主義」、(2)「なかったものはなくなる」、(3)「ベトナムの政治文化に根ざした社会主義」、(4)「資本主義世界市場に参入するための社会主義」という4つに整理をしてみたものの、充分説得力のある議論を展開できているとは思っていない(唯物論研究会編『社会主義を哲学する』大月書店 1992年所収の拙稿「ベトナムにおける『社会主義の道』の堅持」を参照されたい)。著者自身は、この課題に関して、本書の末尾で次のように言及している。

「ベトナムは依然、社会主義建設の究極的目標を放棄したわけではない。刷新政策の推進によって、社会主義への過渡期の最初の段階を首尾良く完了した時、果たしてベトナムは、どのような社会主義の道を歩み始めるのであろうか。それとも、その段階

までには、社会主義の夢を放棄することになるのであろうか。いずれにせよベトナムは、海図を持たない船のように、未知の領域を航海しつつあるように思われる」(218~219ページ)。

「海図を持たない船」というのは、ベトナムの現状を表現するのに適切な表現であり、本書の堅実な議論からすれば、きわめて不透明なベトナムの「社会主義」をめぐる問題に著者が深くは立ち入らなかった理由も理解はできるのだが、やはり、「東アジアの国家と社会」というシリーズの一部として本書が出版されており、中国や北朝鮮を扱った巻では、これら諸国の現体制を「社会主義」という視角から把握することに疑問が提起されていることを考えると、著者の仮説をより大胆に提示してほしかったところである。

IV

本書が議論の下敷きとしている二段階革命論は、コミンテルン時代からのオーソドックスな議論であり、ベトナムに限らず世界的な適用可能性が主張されていた普遍的な革命論である。このことをはじめとして、本書にはベトナムの政治文化に固有の概念なり論理がほとんど顔を出さない。これは、著者がベトナムの政治文化を無視した結果ではなく、ベトナム共産党の革命論に即してベトナムを見る限りにおいて、このような固有の概念や論理を見出すのは困難であるという歴史的事実を反映しているためである。

むしろ、自らを中華世界の「南国」と位置づけたことにはじまり、冷戦体制下の国際社会の中でベトナムを「社会主義陣営の東南アジアにおける前哨」と位置づけていたつい最近に至るまで、ある意味での普遍的な世界の一員として自らを位置づけることが、ベトナムの政治文化のひとつの特徴であり、このことにベトナム・ナショナリズムが表現されていると見ることも可能であろう。

この「伝統」を継承して、ベトナム共産党はつい最近まで、「マルクス・レーニン主義の民族化」という発想には批判的であり、「毛沢東思想」とか「金日成思想」といった概念の正統性を疑問視していた。このベトナム共産党が、1991年の第7回党大会において、

「マルクス・レーニン主義」と並んで「ホーチミン思想」を、党の思想的基盤と位置づけた新しい党規約を採択したことは、こうした「伝統」からの離別、ベトナム固有の政治文化に適合した社会主義像の模索の開始として、注目に値するのである。もっとも、「ホーチミン思想」の規約への明記によって、儒教とか仏教といったベトナムの伝統的思想に対する積極的評価が可能になった側面はあるものの、いまのところこの言葉が意味しているのは、著者が「ホーはベトナム民族の進路をマルクス・レーニン主義と結び付け、ベトナム独自の革命の道を切り開いた国民の父として、そして革命的道徳を貫き通した人民の鑑として、刷新路線の政治的シンボルとなった。そのことはまた、共産党による一党支配体制がホーの選択した道であり、それを守り通すことがホーの子・孫たるベトナム人民の神聖な使命であるとの主張を含意した」(208~209ページ)と指摘している程度の内容であり、ベトナム固有の概念で体系化されたようなものとはなっていない。

したがって、「国家」の正統的思想のありかたとしては、「オーソドックス」な革命論を下敷きとした著者のベトナム論はきわめて適切なものと言えるように思うのだが、「国家と社会」というシリーズの一卷ということで、「社会」という視点を入れて考えてみると、話は異なってくるように思われる。といっても、ベトナムに関しては、この「国家と社会」というテーマに関する研究の蓄積が不十分であることは確かであり、評者自身もこの問題に関しては、「思いつき」程度の議論しか展開できない状況にある。したがって、以下は本書への批判というよりは、こういう問題を今後のベトナム研究は解決していかなければならないのではないかという問題提起として受け取っていただきたい。

評者は、ベトナム国家の正統的思想が「普遍世界」との結びつきを強調する傾向にあったのは、ベトナム国家の社会に対する掌握度が低く、その分、国家が「普遍的真理」によって社会に対する権威を保つ必要性が高かったことの反映だと考えている。このことは、ベトナム共産党の革命論や「社会主義論」にも反映されているように思われる。中国との比較は、中国自身が多様な世界であるため、あまり自信はないのだが、

北朝鮮との比較では、国家の社会に対する包摂度は明らかに北朝鮮のほうがベトナムよりも高いように見える。こう考えると、ベトナム共産党の革命論なり「社会主義論」が「オーソドックス」であるということは、そのような「オーソドックス」な革命や社会主義社会がベトナムに存在したということを意味するものではないことになる。社会自身のありかたが、こうした「オーソドックス」なモデルからはかけ離れたものであった分だけ、ベトナム共産党の路線・政策は「オーソドックス」さを強調していたということになるのではなかろうか。

こうした側面を著者が本書で見逃しているわけではけっしてない。北ベトナムにおける社会主義革命を扱った第2章では、評者流の表現に置き換えれば、ベトナムにおいては共産党が追求していた「社会主義」のモデルが最も国権主義的色彩が濃厚であった時代においても、「社会主義国家」が社会を完全に包摂することはできなかったことが、明瞭に指摘されている(91~93ページ)。ただ、この面の本書の記述に占める部分はあまり大きくなく、その結果として、本シリーズの中国・北朝鮮・ベトナムの3冊を読み比べた時に、ベトナムが「オーソドックス」な革命論が最も根づいた国と受け取られかねない問題(一面では真理だと評者は思うのだが)が存在しているように思われるのである。

もっとも、この点を著者の責任に帰するのは不適切であろう。ベトナム戦争の終結以後、外国の研究者がベトナム社会の実態にせまるような調査を行なうことは、きわめて困難であった。社会調査に外国人研究者が参加できるようになったのは、ごく最近のことであるし、国家と社会の関係を検討する上で不可欠な国家の財政収入の構造などの統計資料が外国人研究者も入手可能となったのも、そう古いことではない。そのため、つい最近までベトナムの現状分析は、主として共産党の路線・政策の分析を軸に展開せざるをえなかったのである。評者自身も、ベトナムにおける革命とエスニシティをめぐる問題の研究を、『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命中のエスニシティ——』(大月書店 1991年)という形でしかまとめられなかった。本書はこうしたベトナム研究の状況をきわめて

如実に反映している。

以上のような意味で、本書は、手堅い方法によって、日本を含めた国際的なベトナム研究の今日的到達点を明示するとともに、今後の課題を暗示する著作となっ

ているように思われる。本書をどう越えるのが、評者を含めた日本のベトナム研究の今後の課題となろう。

(東京大学教養学部助教授)